

研究課題: 適切な食事形態を簡便に評価する方法の検討

研究者名: 中根綾子、山口浩平、加治佐枝里子、吉見佳那子、田頭いとゑ

所属: 東京医科歯科大学大学院 歯学総合研究科 高齢者歯科学分野

A. 研究目的

食事形態を検討する上で、患者の口腔機能の評価は必須となる。しかし、その口腔機能の評価こそが専門的視点が必要であるため、おざなりにされている現状がある。そこで、食形態と口腔機能の不一致による誤嚥性肺炎発症や栄養障害を最小限に抑えるために、咀嚼機能や嚥下機能、栄養状態、口腔機能に着目し、日々の臨床において、医師や歯科医師、コメディカルが簡便に口腔機能、ひいては適切な食事形態を評価しうる指標を検討するため、咀嚼機能と全身の筋量、舌との関連を調査したので報告する。

B. 研究方法

65 歳以上の健常高齢者に対して、基礎情報 (年齢・性別)、身体項目 (Body Mass Index (BMI)・skeletal muscle mass index (SMI))、口腔機能評価項目 (Eichner 分類・ディアドキネシス・舌圧・舌の厚み・咀嚼能力)を調査した。

本研究実施にあたっては、東京医科歯科大学歯学部の倫理審査委員会の承認 (第 1007 号) を得た上で「調査介入および疫学研究における倫理指針」を遵守し、研究の内容や参加の自由についてインフォームドコンセントを行ったうえで実施した。

C. 研究結果

対象者は 105 名 (男性 36 名、女性 69 名)、平均年齢 70.14 ± 6.2 歳であった。BMI 23.2、四肢骨格筋量 16.3Kg、ASM 6.7Kg/m^2 。発声回数 5.6 回/秒、舌圧 34.2kpa、舌苔 0、舌の厚み 43mm、ガム色変化量 46.8 であった。

ガムによる咀嚼機能評価の結果に影響する因子を重回帰分析にて検討したところ、男性においては舌の厚み ($\beta = 0.492, P = 0.001$)、Eichner 分類 ($\beta = -0.4, P = 0.008$)、女性は舌圧 ($\beta = 0.268, P = 0.018$) と Eichner 分類 ($\beta = -0.326, P = 0.004$) が影響を及ぼす因子であった ($P < 0.001$)。

D. 考察と結論

65 歳以上の健常高齢者において、各調査項目の性差はみられなかった。咀嚼機能に及ぼす影響として Eichner 分類が影響しており、欠損歯に対する補綴処置の必要性が示唆された。また、舌の厚みや舌圧も影響がみられ、栄養状態や口腔機能の維持が必要であると考えられる。また舌の機能評価として舌苔を評価項目としたが、健常高齢者においては舌苔の付着は少なく、咀嚼機能との関連はみられなかった。舌の厚みや舌圧は骨格筋量との相関も示唆されており、今後はサルコペニア群やプレサルコペニア群においても検討を行いたい。